

## 陶棺のはなし

古墳時代の墓に用いられた棺桶の一つに「陶棺」があります。

陶棺とは、古墳の横穴式石室に納められた土製の素焼きの棺桶で、古墳時代後期から終末期、六世紀後半から七世紀代に用いられました。

形は、身と蓋で構成され、運搬の際に運びやすくするためか、それぞれが二分割され、これらを組み合わせ



①長浜二号墳出土の陶棺（左）と表面の模様（右）  
（鏡野郷土博物館で展示中）



②長浜二号墳出土の金属器（副葬品）



③加市古墳群から見つかった陶棺

て使用します。底には一二〜二四本の程度の筒形の脚が付けられています。

陶棺は分類すれば、赤褐色で軟質の土師質陶棺、灰色で硬質の須恵質陶棺に大別できます。また、蓋の形も亀甲型といわれる亀の甲羅のような形や家の屋根の形をしたもの、長さは2m前後のものが一般的ですが、火葬骨を納める三〇cm程度のももありです。一般的に多くみられるのは土師質亀甲型とよばれる型式のものです。

この陶棺は、全国的に広く用いられたものではなく、分布の中心は現在の大阪、奈良北部、京都南部を中

心とした近畿地方と岡山県（吉備地域）に偏っています。全国で約八〇〇個確認されていますが、そのうち約七割が岡山県内、さらにそのうち約七割が美作地域で確認されていますので古墳時代の美作の特質の一つともいわれています。

しかし、美作地域に多く分布するものの、吉備地域における陶棺の発祥は美作ではなく、初めは備中・備前から使用が始まり、七世紀代に美作で爆発的に広がります。鏡野町域南部も濃密な分布地域にあたり、陶棺がかつて見つかったと記録される古墳は五五か所、数は六七個に及びます。

写真①は、山城の長浜二号墳から出土したものです。表面の全体にわたって波形の模様が描かれ、身には竹管のようなもので押した丸い模様が

たくさん付けられており、華やかな外見を呈しています。この古墳は工事によって破壊されたため、全容は不明ですが、少なくとも陶棺二個と木棺一個があったとされ、土器や鉄器など多くの副葬品も見つかっています。そのうち鉄鏃と銅製の耳環（イヤリング）はこの陶棺の近くで見

されたようです。この陶棺は、美作地域の中でも古い段階のものと位置付けられています。豊富な副葬品からみても、被葬者の先進的な地域のリーダー像が想像できます。写真③は、明治時代に沢田の加市古墳群から見つかった六個の陶棺のうちの一つで、発見当時に撮影された完全な形の土師質亀甲型陶棺です。現物は東京大学に寄贈されています。

陶棺が普及し始めた頃、美作地域では「たたら製鉄」が始まります。また、陶棺があった古墳から鉄滓（かなくそ）が見つかることもあることから、陶棺の被葬者が鉄生産に関わる人物なのではないかという説もあります。しかし、町内ではたたら製鉄が盛んだった奥津・富などの町域北部の古墳からは陶棺は確認されず、陶棺と鉄生産の関わりは無かったとはいえないものの、直接的に結びつくかどうかは不明です。

美作地域でこれほど普及した陶棺ですが、美作では陶棺が焼かれた窯は見つかっておらず、どこで製作されたのか、そしてこの形のルーツは何なのか、などまだまだ多くの謎が残されています。

参考資料：『鏡野町史』考古資料編、『土の棺に眠る』美作の陶棺、『吉備の考古学的研究』

鏡野町教育委員会 生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733